
お狐と呉服屋

ロースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お狐と呉服屋

【著者名】

ロースト

【あらすじ】

不思議な世界に迷い込んだ青年一人。

一際強い風に煽られ、前髪が視界を遮る。
そんな一瞬の出来事。

黒く、低い雲が足早に去っていく。嵐が来る寸前の静けさがそこには横たわっていた。

映る色は暗い色ばかり。完全な夜になる前の星のない空、空を覆つよう立ち並ぶ高い木々。進み、風が吹く。

開けた先にあつたのは湖。

広い湖はもう一つ月をその水面に描く。そして、自然と言えない、ソレ。湖面に浮くようにある。

まるで違う風景、違和感。でも打ち解けた空気。

水面中央、少女は存在した。

滑らかになされる体重移動、しなやかな身体の動き。洗練されたそれらが、魅惑的だった。

水面に浮かび、沈まず弧を描くその足先にはまるで羽根でもついているかのように軽い。

そして、少女の着る服が、なんとも眼を惹いた。

艶やかな美しい布地は上質なことが暗闇でも知覚させられる。苛烈な色合いが少女の肌を白く浮き立たせ、儂をより引き出す。輪郭が曖昧で存在がぼんやりと見えるのに沸き立つような梶子の香りを醸すかのように錯覚させる。

舞い上がる飛沫と揺れる黒髪が月の光で美しく魅せる。

記憶せむ、と眼を皿にするが頭に記憶として残ることはない。
朧な勘定が残滓となつて残るのみ。

舞が、終わる。

少女は微笑んでいた。

その瞳に昏い揺らぎを乗せてこちらを見る。

私はメデューサに会つたかのように動けず、視線を交わす。
不意に少女が動く。

そのたおやかな両の手を絡め、帯を引く。長く、長いソレが視界を
満たし、少女を映さなくなる瞳。ソレが消えたとき、少女はいなか
つた。

(狐に、化かされた……)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4503m/>

お狐と呉服屋

2010年10月28日04時18分発行